埼玉県立大学 学長メッセージ

新入生および御家族の皆様、保健医療福祉学部および大学院研究科への入学を、埼玉県立大学の教職員と学生を代表して、心よりお祝い申し上げます。

入学試験の手応は如何だったでしょうか。新型コロナウイルスの大流行と言う大変困難な事態にもかかわらず、本学を志望され、ここに集(つど)ってくださった皆さんを迎え、これから一緒に学び、未来を創造する仲間として活動できることを大変嬉しく思います。

言うまでも無く、入学式は、皆さんやご家族、また大学にとって大切な式典です。

しかしながら、このたび、新型コロナウイルス感染症の急速拡大という、未曾有の事態に遭遇しました。この異常事態に臨み、皆さんや参列者の健康を守る事に加えて、人々の健康と福祉に貢献する人材育成と学術の発展に寄与するという本学の使命を考慮し、感染拡大の防止を第一として、極めて残念ですが、このような形(かたち)での式となりました。ご理解をいただきますようお願いいたします。

さて、本学は共生社会の構築に寄与することを目的に、1999年に、看護、理学療法、作業療法、社会福祉の4学科で構成された保健医療福祉学部で設立され、2006年に健康開発学科を設置しました。2010年に大学院研究科修士課程を、2015年には博士課程を開設して、学部から大学院までの一連の高等教育課程が完成しました。

開学以来、教育の柱として専門職連携教育を先駆的に取り入れ、その教育手法と教育研究の成果を、国内のみならず世界に発信しています。2015年には、陶冶、進取、創発からなる大学の基本理念を制定しました。基本理念の3つの言葉はやや難解ですが、大学生活の中で皆さんなりに意味や内容を考えてみてください。そのことが在学中や卒業あるいは修了後における皆さんの活動を豊かにするものと思います。

さて皆さん、この半世紀ほどの間に、保健医療福祉領域の学術や実践は爆発的發展を遂げています。膨大な知見の蓄積と技術革新が人類史上かつて無いほどのスピードで進行し、現場での実践のみならず、人間に対する見方や価値観が大きく変わってきましたし、これからも変わっていきます。その結果、この分野で現在必要とされる知識や技術を、大学在学中に、教員がすべてを教えたり、皆さんが身につけたりすることは不可能となりました。また、せっかく身につけた知識や技術も、数年を経ずに更新を余儀なくされます。

そのような状況に対応して、専門職教育そのものの研究が進展し、それを受けて教員も、在学中に学生へ何を教え、何を教えないか、を常に考えています。それを元に大学教員はカリキュラムを組み立て、学修内容をシラバスで示し、成績評価を行います。

しかしながら、皆さんの主体的、能動的な学びがなければ、十分な学修は望めません。大学は、教員から“教えられた”ことよりも、自ら“学んだ”ことを積み重ねてゆく場です。

一方、偉大な先人が築きあげた思想や科学の大系を学ぶ必要があります。これなしでは、大学での学修は浅薄なものになってしまい、未来への洞察を生みません。

さらに大事なことは、先人達の知的遺産のみでは解決できない課題が、今の世界には数多く存在することを知ることです。高齢化する世界や日本、および埼玉県保健医療福祉をどうするのか、などの大きな枠組みの問題から、病気や貧困、ハラスメント、社会格差の拡大など社会のひずみの中で、不安や恐怖にさいなまれる目の前の人にどのように語りかけ、手をさしのべたら良いのか、など、十分な解決策がいまだに見つからない課題は無数にあります。

それらに向き合うのは皆さんです。先人が残した学術の蓄積を意味する「知の巨人」の肩の上に乗って、遠くの未来へまなざしを向け、解決策を見つけていただきたい。未来は皆さんにしか創りだせません。

ところで、本学は学生のための国際交流事業を、アジアやオセアニア、ヨーロッパの大学と実施しています。多くの卒業生が国際協力機構などを通じて海外で活躍しています。皆さんも海外に目を向け、グローバルに活躍していただきたい。

さらに、本学には、北海道から沖縄までの日本各地、及び海外から学生や教職員が集まっています。教員の専門分野も保健医療福祉領域のみならず、物理学、生態学、宗教学、さらには芸術など、多彩です。

経歴や専門領域が異なる多くの人と挨拶を交わし、知り合い、議論し、感動を分かち合う機会をつうじて、人間性を高め、朝ご飯を毎日しっかり食べ、充実した学生生活を送ることを願っています。

それは、皆さん自身はもとより、埼玉県をはじめとする社会全体にとっても貴重な財産です。

皆さん、大学は、入学したことに意義があるのではなく、そこでどのような学びをするのかが重要です。この埼玉県立大学を皆さんが十二分に活用し、大きく成長されることを祈り、私の挨拶といたします。

本日は、入学おめでとうございます。

埼玉県立大学
学長 萱場 一則